

深谷やぐら群と円通寺跡の概要

①円通寺について

- ・円通寺は横須賀市大矢部二丁目地内の現「海上自衛隊大矢部弾火薬庫」敷地内に所在していました。天保十年（1839年）にお堂が村民に売り払われ、廃寺となったため、詳細な場所は特定できていません。
- ・中世以前の宗派は不明ですが、江戸時代後期には臨済宗円覚寺末の清雲寺の末寺となっていたようです。本尊は現在「清雲寺」にある国指定重要文化財の「木造観音菩薩坐像（通称「滝見観音」）」であったとされています。

②「やぐら」について

- ・『新編相模国風土記稿』に記載されたやぐら群は現在「深谷やぐら群」と呼ばれており、大矢部弾火薬庫敷地内の斜面地に良好な状態で保存されています。
- ・分布範囲はおおむね地図に示した範囲で、最上部に「廟所」とされる1号穴があり、以下数段にわたってやぐらが分布しており、現在計21穴の存在が確認されています。
- ・深谷やぐら群に関しては本格的な発掘調査は行われていませんが、昭和14年（1939年）8月に旧海軍弾薬庫設置のため「廟所及び三浦党墳墓」の石塔類などが清雲寺に移転される際に、故赤星直忠氏らによる立会い調査が行われ、その概要が赤星直忠 1940「三浦党改葬に立会って（一・二）」『神奈川文化（12・13）』で報告されています。

深谷やぐら群と円通寺跡における文化財について（資料）

1. 深谷やぐら群と円通寺跡の概要

(1) 深谷やぐら群

- ・現在清雲寺にある文永八年（1271年）銘板碑の存在から、鎌倉時代の三浦一族の一人である左衛門尉平（佐原）盛信またはその一族が「やぐら群」の造営に強く関わりがあった可能性が指摘できる。「やぐら群」造営に関わった個人名または一族が特定できる可能性のある事例は極めて少なく、横須賀市内では唯一の事例である。
- ・最上部にある1号穴は切妻造りの家形を呈する前室（妻入り、拝殿？）と後室（平入り、本殿？）の2室からなる社殿形式とも思われる複室構造であり、他に類例を見ない。また鎌倉以外では大規模な「やぐら」であり、細部まで極めて丹精に仕上げられ、壁面及び天井部は漆喰塗りである。この1号穴の墓前域に、上記「文永八年（1271年）銘板碑」が建てられていたとされることから、1号穴も同板碑に前後する時期に造営された可能性が高い。現在、清雲寺にある凝灰岩製で古相を呈する伝為通・義継五輪塔が安置されていたとされているが、板碑の年号や1号穴の形状などと整合的である。

以上の点から、後世に改修を受けている可能性はあるが、1号穴のみを取り上げても本来の形状を留めるものであった場合、中世における「やぐら」の一典型例として、極めて重要な価値を持つ遺構といえる。

- ・『新編相模国風土記稿』の「三浦氏古墳図」に代表されるとおり、1号穴の他、18穴の「やぐら」の存在が古くから知られていたが、その「やぐら群」全体を取り巻く自然環境と景観が、ほぼ当時のまま維持されている全国的にも数少ない事例の一つである。また各「やぐら」に見られる五輪塔は凝灰岩製が大半であり、その点からも全体に古相を呈しているが、岩盤の性格のためか遺存状態が良好である。従前から知られていた「やぐら」は昭和14年の改葬時に玄室内が掘られているが、墓前域を含め外周部は手付かずであり「やぐら群」全体としての学術的価値は損なわれてはいない。また平成17年の現地踏査で新たな「やぐら」が2穴確認されたことから、未発見の「やぐら」がさらに存在すると予想される。以上の点から1号穴のみならず、その他の「やぐら」についても一「やぐら群」として極めて貴重な遺跡であるといえる。

(1) 円通寺

- ・永保3年(1083年)没の三浦長門守為通が開基とされる。
- ・『新編相模国風土記稿』の「三浦氏古墳図」他に「やぐら群」と一体として、挿図入りで記載されている。これらの絵図面や近世以降の諸記録では草葺屋根の「お堂」1棟のみが描かれているが、文化9年(1812年)刊の『三浦古尋録』では「寺ナク」とも記されており、以後の絵図や記録にある「お堂」は再建の可能性がある。また近世以前の様相については全く不明である。
- ・現在、清雲寺にある国指定重要文化財の木造観音菩薩坐像(通称「瀧見観音」)が元来円通寺の本尊であったとされることや、寺域内に「深谷やぐら群」を含んでいたことなどからみて、当初から草葺屋根のお堂一棟のいわゆる単堂形式の寺院のまま推移したとは想定困難である。

※清雲寺所在の円通寺・深谷やぐら群関連遺物

木造観音菩薩坐像(国指定重要文化財:通称「瀧見観音」)・瀧見観音標柱、伝三浦為継・義継墓標(五輪塔)各1基、文永八年(1271年)銘板碑、石燈籠2基(享和3年(1804年)三浦長門守為種奉獻)、宝篋印塔2基、十一面・千手観音像、他

- ・以上の点から、現在のところ「円通寺」跡の評価については、未だ近世末期の所在地すら特定できておらず、発掘調査他の各種調査を行い、その実態を解明することがまず求められる。その結果、一定の様相が解明されれば「深谷やぐら群」と一体の遺跡として、貴重な存在になるものと予想される。

2. 記録類

○天明六（1786年）

「一、山壺ヶ所・竪五拾間（91m）・横参拾間程（54.6m）見捨地。三浦氏元祖為通公・義継公御廟所有之・但山上之岩穴ニ御座候、本山鎌倉山之内村円覚寺末、尤無旦那年来住職モ無ク清雲寺兼帶罷有、本尊ハ十一面觀音菩薩有之右觀音（国重文＝清雲寺滝見觀音か？）ハ丙午年ニ惣開帳有之其間午年ハ中開帳、然ル処天明六（1786年）丙午年開帳此年清雲寺へ觀音行」（「矢部郷御鑑帳」）

○享和元年（1801年）又は享和年中

三浦長門守・三浦志摩守の両家、三浦家の先祖・遺跡などの調査を行い、廟所その他の普請を行う。大矢部村の総鎮守社を浅間様から近殿様に変える。（「矢部郷御鑑帳」）

○文化元年（1804年）

近殿神社の社殿を新築する。（「矢部郷御鑑帳」）

三浦古尋録 文化9年刊 1812

○深谷山円通寺

是ハ三浦長門守為通ノ開基ニテ昔ハ寺有シカ其後大破二及ヒ今ハ寺ナク深谷山ノ廟所ノミ残ル。上リ口ノ洞穴ニ弘法大師ノ作十一面觀音瘞地藏少シ上リテ巴御前硯ノ水右ノ方ノ洞穴ニ梶原七郎景氏同二郎景衡ノ墓、別ノ洞ニ梶原六郎景国同七郎景宗ノ墓、別洞ニ梶原八郎景則同九郎景連ノ墓、別洞ニ梶原平治左衛門尉景高同三郎景茂ノ墓、左ノ方ノ別洞ニ大庭小二郎景兼、土肥先二郎左衛門尉維平ノ墓、別洞ニ梶原刑部丞朝景同兵衛尉景貞ノ墓、別洞ニ和田ノ二郎義氏金窪四郎左衛門尉義直ノ墓、右ノ方ノ別洞ニ從五位下和田小太郎辨左衛門尉義盛岡崎太郎義国同二郎実村、左ノ方ノ別洞ニ岡崎千太郎与市左衛門尉実忠土屋大学介義清同兵衛尉義則和田五郎兵衛尉義重同六郎兵衛尉義信同七郎秀盛同新左衛門朝盛ノ墓、絶頂ノ洞穴ニ唐仏滝見觀音安置ス、此觀音常ニハ清雲寺ニ有リテ六十一年目毎深谷山ニ移シテ開帳有開帳初リテ文化十癸酉年迄十一度目ノ開帳ト云六百七十一年ニナル

宝物

法華經鼻陀羅 円満院ノ宮御筆 三浦為通公太刀一振 十六善神掛物 弘法大師ノ筆 鳥ノ海弥三郎矢根 為次公筆短冊二枚 定家卿御直筆御歌巻物 聖徳太子御作阿弥陀如来 惠深僧都ノ筆 勝軍地藏 三浦為次看經仏薬師如来惠深ノ作 三浦義澄公太刀一振 正宗ノ作太刀一振 以上三浦長門守為通奥州ニ在城ノ処、人王七十代御冷泉院ノ御宇康平六癸亥年此三浦郡ヲ領シ衣笠ニ移ツテ居城シ永保三年三月十四日行年五十四歳ニシテ逝去

法名 深谿院殿円覚大禪定門

人王七十四代堀川院寛治三年奥州武衛家衡征伐ノ時八幡太郎義家公ニ随ヒ四陣ノ備ハ長門守為通、二陣ノ備ハ舍弟三浦平太郎為次ト太平記ニ見エタリ

登深谷山 服 子遷

無限秋風木葉飛林響過人稀 蓋山城外臨深谷独自蘇門長嘯掃

深谷山 菅 時憲

攬巖岑蔚間有洞窟凡二十余所 皆安石像苔蘚剥蝕如仙如仏音甚
樹暗雲深不見人洞門幾処傍嶙峋 欲將長嘯驚虛牝始識斯中棲谷神

孟山三浦氏旧墟 菅 時憲

散步蓋山陸城墟知音誰溪寒泉響小林暗乘声悲尋往迷深谷披蓬讀古碑年名唯兩字半已綠苔滋

○ 円通寺

深谿山と号す 前寺末(清雲寺) 本尊瀧見観音身2尺余 郡中を安ず 開基三浦長門守爲通なり

永保三年三月十四日卒 深谿院円覚爲通大御門 爲通は松 又三浦義継の位牌を置く 円通寺大身義継大御定門と記す 義継は爲通の孫なり 相模介 高小五郎忠通の子なり 平大夫と称す 三浦氏の祖なり となり 三浦庄司と称す 義継に平治元年二月二十一日卒す

年九十三 中興及改宗も清雲寺に同く大雅清音なり

○ 三浦氏古墳

村北小名深谷の山間に在り 円通寺山腹を穿て巖窟を作る凡十九所 窟中各五輪塔相並べり 此内大なる窟中に間口二丈余 奥行二丈余五輪塔二基あり 中央に千手観音の石像を置く 是三浦爲通同義継の墳なり 其余皆三浦一党九十三騎の墓なりと云う 又板碑一基あり 文永八年五月十四日 左衛門少尉平盛信と鐫る

碑高五尺余 座像は佐原氏にて先祖善徳の爲に各墓の碑を造立せしと伝ふ



三浦氏古墳圖

○天保十年 (1839年)

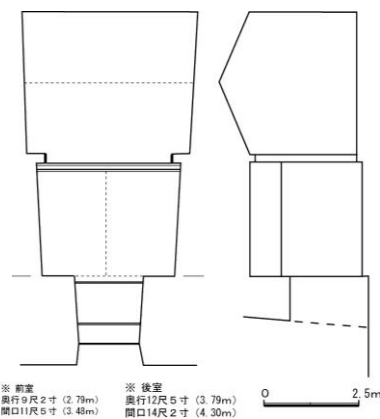
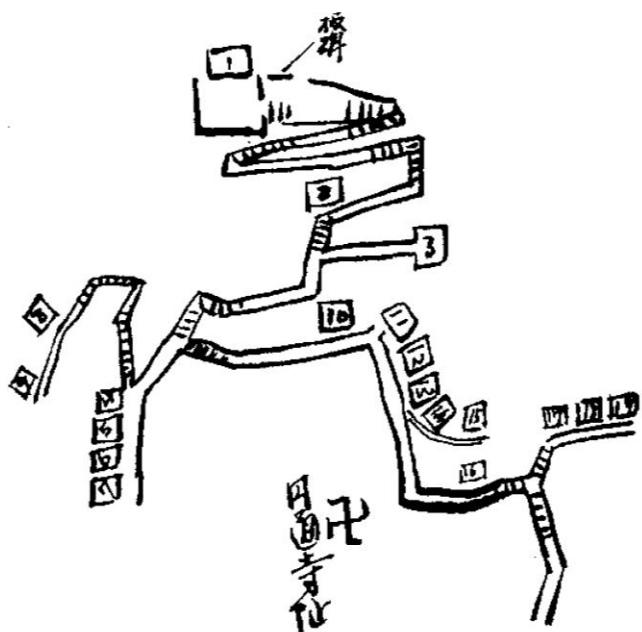
「一. 本堂 縦 弍間半 (4.55m)・横 弍間半 (4.55m) 但し、天保十年 (1839年) 本村善右衛門へ売り 」(「矢部郷御鑑帳」)

○昭和 14年 (1939年) 8月

旧海軍弾薬庫設置のため「廟所及び三浦党墳墓」が清雲寺に移転される。

このとき故赤星直忠氏らによる立会い調査が行われる。

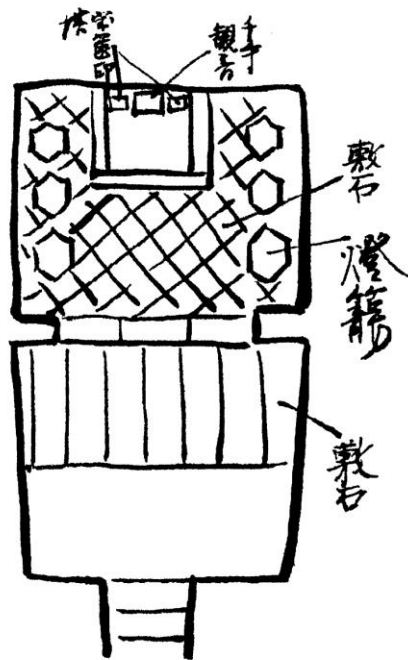
○赤星直忠 1940「三浦党改葬に立会って（一・二）」『神奈川文化（12・13）』抜粋



1号穴(廟所)略測図

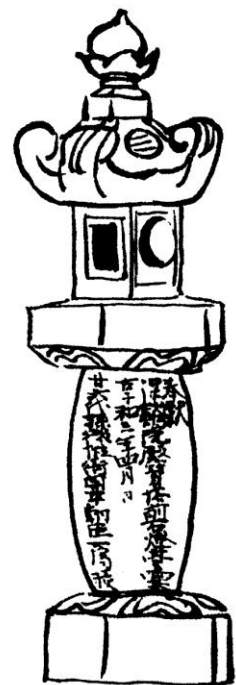
横須賀市大矢部町深谷は古くから三浦為通及義継の廟所として知られ、『三浦古尋録』『新編相模国風土記』『三浦郡御寺々御廟所向図』等にもその図を描いている。廟所の下には和田義盛以下建暦三年の乱に討死した三浦党の墳と伝えられるものが存したが、昭和十四年夏深谷一帯の地が海軍用地として買収せらるるに及び、廟所及三浦党墳墓は止むを得ず移転する事となった。移転するに及んで県史蹟調査委員たる赤星は清雲寺住職武久耕道師と共に終始之に立会い、且つ現状を調査したので、その状態を書きとめて置くことにした。

昭和十四年八月 赤星直忠



廟所平面図

前室は妻入りに作る。(奥行九尺二寸 間口十一尺五寸)
 後室は平入りに作る。(奥行十二尺五寸 間口十四尺二寸)
 天井壁面に漆喰を塗る。通常 の如く塗りあるを以って、唐草紋等呼ばれている。



廟所内奉獻の石灯籠は右の如きもの。この石灯籠はこの他、満昌寺内大介墓前、薬王寺址義澄墓前、清雲寺内為継墓前の三所にある。

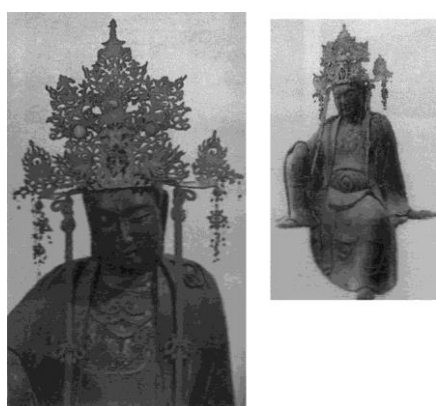


廟所中央には右の如く安置されていた。墓石は寄集めものである。移転に先立って発掘式を八月六日挙行(午前十時)。参列者。衣笠会長 後藤八郎氏。市役所 朝日邦之助氏。県庁 山田寅元氏。県調査委員 赤星(筆者)。青年団衣笠支部長 長澤房次郎氏。衣笠出張所長 大塚角増氏。他 駐在所巡査。青年団員若干。石工 数名。僧侶 清雲寺、貞昌寺、満昌寺、大善寺。式次第 一、読経 観音經、大悲呪、舍利礼文。二、焼香。

○清雲寺内の円通寺・深谷やぐら群関連遺物

国重文「木造観音菩薩坐像（通称「滝見観音」）」

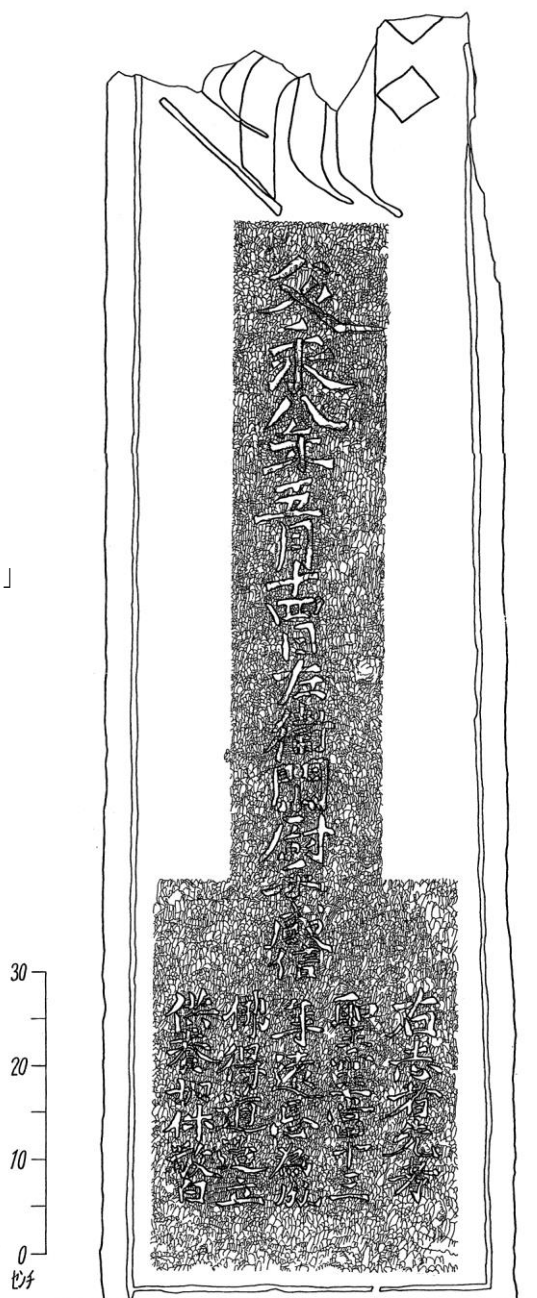
市史跡「伝三浦為継とその一党の廟所」内の板碑（文永八年（1271年）銘板碑）、伝為通・
義継五輪塔



木造観音菩薩坐像（通称「滝見観音」）」



伝為通・義継五輪塔



文永八年（1271年）銘板碑



1号穴（伝廟所、以下略）前庭部



1号穴全景



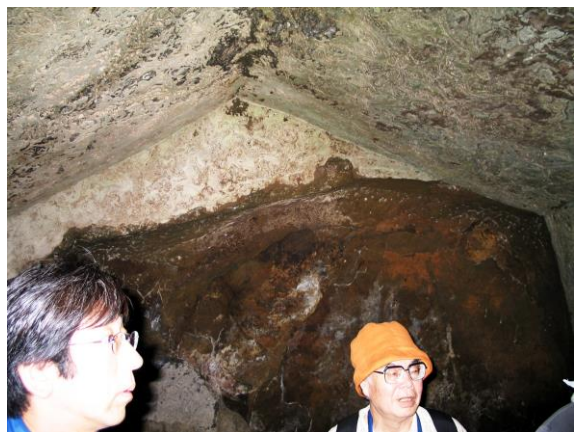
1号穴前室前壁上



1号穴前壁右侧



1号穴前室と後室との境



1号穴後室側面壁